

ガラテヤ 6回
「ペテロの偽善」 ガラ 2: 11~21

1. はじめに

(1) ガラテヤ人への手紙のアウトライン

- ①個人的弁明：パウロの使徒職（1：1～2：21）
- ②教理的教え：信仰義認（3：1～4：31）
- ③実践的教え：キリスト者の自由（5：1～6：18）

(2) 文脈の確認

- ①パウロは、ガラテヤの信者たちが「ほかの福音」に移っていくことに驚いた。
- ②「ほかの福音」を伝える者は、呪われるべきである。
- ③パウロの福音は、神からの啓示によって与えられたものである。
- ④パウロの福音理解は、使徒たちのそれと一致していた。

2. メッセージのアウトライン

- (1) 律法主義者を恐れるペテロ（11～13節）
- (2) ペテロを戒めるパウロ（14節）
- (3) 信仰義認を主張するパウロ（15～21節）

3. 結論

- (1) ペテロの貢献
- (2) ペテロの失敗
- (3) 私たちへの教訓

ペテロの偽善的行為について学ぶ。

I. 律法主義者を恐れるペテロ（11～13節）

1. 11節

Gal 2:11 ところが、ケファがアンティオキアに来たとき、彼に非難すべきことがあったので、私は面と向かって抗議しました。

- (1) これは、パウロの履歴書に記された歴史的出来事の最後のものである。
 - ①福音を守るために、パウロは、使徒のリーダーであるペテロを非難した。
 - ②これは、パウロの使徒職を証明するためのエピソードでもある。

- (2) 前回取り上げた箇所でのペテロと、ここでのペテロは、劇的に異なる。

①パウロがエルサレムを訪問した際、ペテロは友好の右手を差し出した。

②ガラ 2 : 9

Gal 2:9 そして、私に与えられたこの恵みを認め、柱として重んじられているヤコブとケファとヨハネが、私とバルナバに、交わりのしるしとして右手を差し出しました。それは、私たちが異邦人のところに行き、彼らが割礼を受けている人々のところに行くためでした。

(3) ペテロがアンティオキアの教会を訪問した。

①「ケファ」というヘブル名が使用されている。

②使徒の働きの中には、この訪問は記されていない。

③恐らく、パウロ、バルナバ、テトスがエルサレムから戻った直後であろう。

④ペテロが偽善的行為を行ったので、パウロは面と向かって抗議した。

⑤パウロは、ペテロと同じ権威を委ねられた使徒として行動している。

*パウロは、12使徒からは独立した、対等な立場に立つ使徒である。

2. 12節

Gal 2:12 ケファは、ある人たちがヤコブのところから来る前は、異邦人と一緒に食事をしてきたのに、その人たちが来ると、割礼派の人々を恐れて異邦人から身を引き、離れて行ったからです。

(1) アンティオキアの教会には、ユダヤ人信者と異邦人信者がいた。

①彼らは、ユダヤ教の食物規定に囚われず、食事をともにしていた。

②ペテロは、皮なめしシモンの家で幻を見たことがあった（使 10 : 9~16）。

*「神がきよめた物を、あなたがきよくないと言ってはならない」

③ペテロには、異邦人信者と食事をともにすることへの抵抗感はなかった。

④これは、ユダヤ人と異邦人のキリストにある一致を示す美しい光景だった。

⑤また、ユダヤ人も異邦人も、律法から解放されたことを示す光景だった。

(2) しかし、あることが原因で、ペテロは異邦人から離れ行った。

①「ある人たちがヤコブのところから来る」

②パウロは彼らのことを「兄弟たち」とは呼んでいない。

③彼らは、エルサレムから下って来た律法主義者たちである。

④彼らは、ヤコブの承認を得ていたわけではない。

(3) 「割礼派の人々を恐れて異邦人から身を引き、離れて行った」

①ペテロの神学が変わったわけではない。

②彼は、恐れゆえに異邦人信者と一緒に食事をしなくなったのである。

③使 11 : 18 で見られたペテロの姿とは、大いに異なる。

Act 11:18 人々はこれを聞いて沈黙した。そして「それでは神は、いのちに至る悔い改めを異邦人にもお与えになったのだ」と言って、神をほめたたえた。

3. 13 節

Gal 2:13 そして、ほかのユダヤ人たちも彼と一緒に本心を偽った行動をとり、バルナバまで、その偽りの行動に引き込まれてしまいました。

- (1) ペテロの欺瞞的行為が、他の人たちに悪影響を与えた。
 - ①ほかのユダヤ人信者も、異邦人信者から離れて行った。
 - ②ついに、バルナバまでその偽りの行動に引き込まれてしまった。
 - ③バルナバはパウロの同労者であったので、パウロにとっては衝撃であった。
 - ④恐らく、聖餐式が2つ（ユダヤ人信者向けと、異邦人信者向け）別々に行われるようになったのであろう。
 - ⑤今日でも、正統派のユダヤ人は異邦人とは食事をともにしない。
 - * 異邦人と同じ器を使うと、儀式的な汚れを受けると考えている。

(2) ペテロやバルナバは、ユダヤ人と異邦人はキリストにあって一つであると教えていた。

- ①ところが、実践においては、これを否定するような行動を取った。
- ②教えていることと行いが一致していないことを、偽善という。

II. ペテロを戒めるパウロ（14 節）

1. 14 節

Gal 2:14 彼らが福音の真理に向かってまっすぐに歩んでいないのを見て、私は皆の面前でケファにこう言いました。「あなた自身、ユダヤ人でありながら、ユダヤ人ではなく異邦人のように生活しているのならば、どうして異邦人に、ユダヤ人のように生活することを強いるのですか。」

- (1) パウロはみなの前（公の場）で、ペテロの過ちを指摘した。
 - ①福音の真理が曲げられるのを恐れたからである。
 - ②ペテロの欺瞞的行為は公の場で行われたので、叱責も公に行われる。

- (2) パウロの論理は、以下のようなものである。
 - ①自分たちユダヤ人は、律法によっては救われないということを知った。
 - ②自分たちは、イエス・キリストを信じて救われた。
 - ③異邦人も同じように信仰によって救われた。
 - ④なぜ、異邦人信者にユダヤ人のように生活することを強いるのか。

- (3) ペテロがどう応答したかは、書かれていない。
- ①その偽善の重大さのゆえに、大いに恥を被ったであろう。
 - ②パウロの叱責のことばが 14 節で終わったかどうかを判定するのは難しい。
*パウロは、もっと多くのことを語ったはずである。
 - ③とりあえず、15 節以降はパウロによる神学的考察と考えておこう。
*15~21 節は、ガラテヤ 3~4 章へのブリッジとなる。
*ガラテヤ 3~4 章の主要なテーマは、「信仰義認」である。

Ⅲ. 信仰義認を主張するパウロ (15~21 節)

1. 15 節

Gal 2:15 私たちは、生まれながらのユダヤ人であって、「異邦人のような罪人」ではありません。

- (1) パウロは、ユダヤ人の同胞を意識しながら書いている。
- ①パウロ、ペテロ、バルナバ、その他のユダヤ人信者が含まれる。
- (2) 「私たちは、…『異邦人のような罪人』ではありません」
- ①パウロがそう考えていたということではない。
*この言葉は、パウロ独特の皮肉 (アイロニー) である。
 - ②ユダヤ人一般は、異邦人を罪人と見なし、彼らに対して優越感を持っていた。
 - ③ペテロの欺瞞的な行為は、ユダヤ人の優越感の現われである。
 - ④その私たちユダヤ人でさえも、律法ではなく信仰によって救われた。
 - ⑤それゆえ、異邦人に律法を押しつけてもなんの意味もない。

2. 16 節

Gal 2:16 しかし、人は律法を行うことによってではなく、ただイエス・キリストを信じることによって義と認められると知って、私たちもキリスト・イエスを信じました。律法を行うことによってではなく、キリストを信じることによって義と認められるためです。というのは、肉なる者はだれも、律法を行うことによっては義と認められないからです。

- (1) 「義と認められる」
- ①ガラテヤ書で最も重要な言葉は、「ディカイオオウ」(義とされる) である。
 - ②その言葉が、ここで初めて登場する。
 - ③これは法律用語である。法廷で「義と宣言される」という意味である。
- (2) 義とされる方法 (not A but B)

- ①否定的宣言—律法を行うことによってではない。
- ②肯定的宣言—イエス・キリストを信じる信仰による。

(3) 「私たちもキリスト・イエスを信じました」

- ①私たちの中に、パウロもペテロもバルナバも含まれる。
- ②パウロとペテロとバルナバの福音理解は、同じはずである。

3. 17～18 節

Gal 2:17 しかし、もし、私たちがキリストにあつて義と認められようとするので、私たち自身も「罪人」であることになるのなら、キリストは罪に仕える者なのですか。決してそんなことはありません。

Gal 2:18 もし自分が打ち壊したものを再び建てるなら、私は自分が違反者であると証明することになるのです。

- (1) ここでパウロは、「キリスト論的アプローチ」を取っている。
 - ①もし律法を行わないことが罪なら、キリストを信じた人は、律法を行わなくなるので、「罪人」となる。
 - ②それなら、キリストは罪の助成者となるが、それはあり得ない。
- (2) ペテロの欺瞞的行為は、自分自身を違反者にするものである。
 - ①自分は律法に違反していたことを認めることになる。

5. 19～20 節

Gal 2:19 しかし私は、神に生きるために、律法によって律法に死にました。私はキリストとともに十字架につけられました。

Gal 2:20 もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。今私が肉において生きているいのちは、私を愛し、私のためにご自分を与えてくださった、神の御子に対する信仰によるのです。

- (1) キリストを信じた者の体験を「死と復活」というキーワードを基に解説する。
 - ①信者の体験は、信仰によってキリストの死と復活につながるということ。
 - ②同じことが2度繰り返されているのは、ヘブライ的対句法を思わせる。
- (2) 死の体験
 - ①「神に生きるために、律法によって律法に死にました」
 - *律法は、律法に違反した者の死刑を要求する。
 - ②「私はキリストとともに十字架につけられました」
 - *キリストは、十字架の上で罪の代価を払ってくださった。

(3) 復活の体験

- ①「もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです」
- ②「今私が肉において生きているいのちは、私を愛し、私のためにご自分を与えてくださった、神の御子に対する信仰によるのです」

6. 21節

Gal 2:21 私は神の恵みを無にはしません。もし義が律法によって得られるとしたら、それこそ、キリストの死は無意味になってしまいます。

- (1) 「私は神の恵みを無にはしません」は、ペテロとの対比を考えたものである。
 - ①恵みとは、受けるに値しない者に注がれ神の祝福である。
 - ②ペテロの欺瞞的行為は、神の恵みを排除したものである。
 - ③義が律法によって得られるなら、キリストの死は無意味なものになる。

結論：

1. ペテロの貢献

- (1) ペテロは、12使徒のスポークスマンであった。

①使 2：14

Act 2:14 ペテロは十一人とともに立って、声を張り上げ、人々に語りかけた。「ユダヤの皆さん、ならびにエルサレムに住むすべての皆さん、あなたがたにこのことを知っていたきたい。私のことばに耳を傾けていただきたい。」

- (2) ペテロは、教会誕生の立役者であった。

①使 2：41

Act 2:41 彼のことばを受け入れた人々はバプテスマを受けた。その日、三千人ほどが仲間に加えられた。

- (3) ペテロは、ユダヤ人、サマリア人、異邦人のために御国の扉を開いた。

①使 2章、8章、10章

2. ペテロの失敗

- (1) ペテロは、十字架の預言を否定した。

①マタ 16：22

Mat 16:22 すると、ペテロはイエスをわきにお連れして、いさめ始めた。「主よ、とんでもないことです。そんなことがあなたに起こるはずがありません。」

(2) ペテロは、イエスを知らないと言った。

①マタ 26 : 69～70

Mat 26:69 ペテロは外の中庭に座っていた。すると召使いの女が一人近づいて来て言った。「あなたもガリラヤ人イエスと一緒にいましたね。」

Mat 26:70 ペテロは皆の前で否定し、「何を言っているのか、私には分からない」と言った。

(3) ペテロは、アンティオキアの教会で、律法主義者を恐れた。

①ペテロには、圧力がかかると妥協するという癖があった。

3. 私たちへの教訓

(1) 神は、不完全な器を用いてご自身の計画をお進めになる。

①人間の失敗は、神の計画を無効にするものではない。

(2) 使徒たちは、神の靈感によって啓示の書を記している間だけ、間違いを犯すことから守られている。

①それ以外の時は、間違いを犯す可能性がある。

(3) 指導者に対する姿勢

①尊敬の念を持って接する。

②間違いを犯す可能性もあることを、心に覚える。

③すべての判断を、聖書に基づいて行う。